

「分断の世紀」をどう生きるか

紛争やテロ、環境破壊など、世界情勢は混迷を極めている。社会で分断が起こる背景には、これまでリベラル・デモクラシーを支えてきた中間層が衰退し、「格差社会」を招いたことがある。大衆の不満はポピュリズムを生み、反グローバリズムや保護主義が席卷、これまで世界を支えてきた欧米型の資本主義・民主主義は機能不全に陥った。こうした試練を乗り越えて行く力は「文化」にある。多様性を包摂する日本文化や寛容の心を広く普及し、世界の安定と発展に貢献する時である。

当協会が2014年に承継した「日本万国博覧会記念基金事業」では、基金の運用益でこれまでに日本を含め110か国に約4,400件、総額190億円もの助成を行い、日本文化や精神を普及してきた。この座談会では、グローバルな視点から日本人の精神に想いを寄せる識者の皆さまに、今日をいかに生き、世界平和に貢献できるのかについてご意見を伺った。



堀井良殷 (司会)
関西・大阪21世紀協会
理事長



エバレット・ブラウン氏
国際フォトジャーナリスト
日本文化研究家



近藤誠一氏
近藤文化・外交研究所代表
元文化庁長官



松山大耕氏
臨済宗 妙心寺 退蔵院
副住職

(50音順)

世界の現状をどう見るか

堀井 1970年に大阪で開催された日本万国博覧会は、その「開催の意図※」に記されているように、「世界にはさまざまな文明が多角的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中こそ進歩が望まれるべき」という理念のもと開催されました。当時から50年近く経った今も、この理念は少しも色あせることなく、今の危機的な世界情勢を先見していた先人の知恵と志に改めて敬意を覚えます。

そして昨年は、まさにイギリスやアメリカで既存の政治に失望した民衆の不満がポピュリズムや反グローバリズムを生み、人類の将来への不安が増大しています。写真家としてアメリカから日本に移り住んで30年近くになるブラウンさんは、こうした情勢をどのように見ておられますか。

ブラウン この度のアメリカの大統領選挙の結果には、正直、驚きと失望を感じました。これはアメリカに限らず世界的な傾向です。人類は本当に進歩しているのかと思いました。こうした中で日本人は、自分たちが持っている多様性や柔軟性をもっと意識して、文化の力を生かして世界に臨めばいい

と思います。

堀井 今、世界各地で起きている紛争は、宗教の違いが原因の一つになっているようにも思います。松山さんは、宗教家としてダボス会議をはじめとした世界的な集まりの場で日本人の心を伝えられていますが、紛争の絶えない世界情勢をどのように見ておられますか。

松山 宗教が分断の原因の一つだという指摘は否めません。昨年、イタリアで開催されたローマ教皇主催の宗教者会でも、この問題が議論されました。5年前の同会では、イスラム教の指導者から、「ジハードとは自分の怠け心を戒める意味であり、コーランには異なる宗教の人をイスラム教に従わせたり、ましてや殺してもいいという教えはない」とも聞きました。

すべての宗教の役割は「不安を和らげる」の一言に尽きません。だから宗教を戦争の理由にするのは、宗教の役割とは正反対。争いが生まれるのは、二元論で物事を判断するからではないでしょうか。白か黒、善か悪という考えで物事を見ると、どうしても対立の構図になります。

仏教には、物事を二つに分けて見てはならないという「不二(ふに)」の言葉があります。物事は白と黒に分かれている

※「日本万国博覧会 公式記録(1972年)」より「開催の意図」(抜粋)

「・・・日本万国博覧会がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多角的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中こそ進歩が望まれなければならない、という『調和的發展』の精神であった。これは東洋思想の『和』の心を現代世界に呼戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものであった。」

のではなく、オセロの駒のように表裏一体なのです。お地蔵さまは閻魔さまの化身とされ、コインの裏表と同じ。私は日本人の宗教家として、「物事を二元論で見てはならない」ということを、とくに広めたいと思っています。不二の見方が世界に広まれば、もう少し本当の意味での平和が達成できるのではないのでしょうか。

堀井 近藤さんは、一昨年の「関西・大阪文化力会議2015」の基調講演で、「人類はリベラル・デモクラシーを導入したことで、平和と繁栄は恒久的に約束されたと思っていたが、近年、世界各国でそれが機能していない」と指摘されました。その言葉の通り、リベラル・デモクラシーの手本たるイギリスやアメリカで、今まさにそれを否定するような事態が起きています。

近藤 今日の科学技術や民主主義、自由経済の発達は、デカルトの物心二元論をベースに西洋が3~400年かけて培ってきた近代合理主義精神の賜です。しかしそれは、合理性や効率、正義といった理性を偏重し、人間が本来持っている感情や感性を置き去りにし、得てきたものです。今にいたってそのギャップが顕在化し、「アメリカンドリームだといわれて努力すれば報われると教わってきたが、金持ちは金持ちのまま、俺たちはいくら頑張っても暮らしは良くならない」とか、「移民のせいで自分たちの職がない。正義だの民主主義だの、きれいごとはたくさんだ。俺たちの生活をどうしてくれるのか」などと民衆の不満が一気に噴出しています。西洋の合理主義に振り子が振れて極端な貧富や社会格差が生まれた結果、今また振り子が戻りはじめていますね。先進国のエリートが押し付けてきた価値観、すなわち感情より理性を重視する生き方に、大多数の民衆はついていけないのです。

一方、日本人には、物事を白か黒で決着させるような二元論ではなく、曖昧なもの、多様なものを受け入れながらバランスを保って生きて行こうとする知恵や文化があります。これは日本人が自然に学んで生きてきたことにも起因しているでしょう。厳しい冬に耐えた後は必ず暖かい春が来て、草木萌える夏となり、実りの秋を迎える。時には自然災害に悩まされながらも、人々は心の安らかさを保ち、少々のは我慢して争いを避けようとする和の心を培ってきました。また、島国であることも幸いして他民族から侵略を受けることなく、そうした精神的な価値観が打ち壊されずに営々と培われてきました。

実は、私は長い外務省勤めの中で、国際政治と文化は異質なものだと思っていました。しかし今、こうした日本人の精神文化こそが、世界の諸問題を解決する上で役立つのではないかと考えています。

ブラウン こうした日本の精神文化の基礎が何であるのかをもっと議論するべきだと思います。例えば、日本は大陸と違って安全でおいしい水が豊富にあります。地中からは温泉も湧き出ます。一方、地震や台風といった自然災害も多い。日本人はそういう自然の恵みと恐ろしさの両方を受け入れ、柔軟に対応して生きてきました。

堀井 私はかつて外国人のホームパーティーで「Tea or coffee?」と聞かれ、忙しく立ち振る舞っている奥さんを気遣って「どちらでもいいですよ」と答えたら、「はっきりしてくれ」と怒られた経験があります。私たち日本人は、外国人から「曖昧で何を考えているか分からない」といわれ、それをコンプレックスのように感じてきましたが、近藤さんがおっしゃったように、実はその曖昧さこそ大切なんですね。今、それを胸を張っていえる時代になり、いよいよ私たちの出番だという気がしてきました。

「being」を求める旅

堀井 物事を二元論で判断するのではなく、多様性を受容し、寛容さを大事にする日本人の精神文化を、どのようにすればもっと世界に発信できるのでしょうか。

ブラウン ひとつは観光です。私の実体験でもありますが、日本に来る外国人旅行者は、日本人と接するだけで安らぎを感じます。とくに地方の町でお年寄りに出会って話をする、なぜか心が安らぎます。古き良き日本の精神性を受け継いでおられるからでしょうか。そうした日本で感じる安らぎは、貴重な観光資源だと思います。

今、アメリカがトランプ政権になって、日本の観光事業はチャンスを迎えたと言えるでしょう。国内の政治的混乱に疲れたアメリカ人が、心の癒しを求めて日本にやってくるからです。また、日本の仏教も中国人の間で流行していることに注目したいです。

松山 昔は観光の目的といえば「seeing」でした。例えば京都だと、寺や神社などを見て巡るといったものです。それが最近、舞妓さんの衣裳を着て街を歩いてみたり、和菓子作りを体験してみるといった「doing」に変わってきました。私は、今やさらに進んで「being」、すなわち物事の本質や精神性を求めているように思います。自分は何のために生きているのか、何のために仕事をするのかといった哲学や理念を、旅の中で見出そうという人が増えているんですね。そして、そういう思いは人と心を触れ合うことでより強く体感できます。私の寺にも、会社が休みのたびにスウェーデンからやってくる社長さんがおられ、幹部社員と一緒に座禅や庭掃除をして帰られることもあります。これこそ「being」で、寺の仕事に触れることで、心のお土産を持って帰られるのです。

そもそも「観光」の「観」は、心で観るという意味がありますからね。こうした体験をSNSや口コミで伝えてもらうというのは、世界発信としては一見地味ですが、長い目で見ると非常に効果的だと思います。つい最近、アメリカ在住のユダヤ人で、パレスチナ人のイスラム教徒と旅行会社を共同経営している人と話したところ、「日本人の宗教観は世界でも特異だ。ぜひそれを知らしめたい」とおっしゃっていました。

堀井 「seeing」から「doing」、そして「being」になってくるといふ松山さんのお話は、今後の観光政策に対する貴重な示唆だと思います。今や日本人であること自体がブランドに

なっている。日本人の生き方そのものが、クールジャパンだといっている。

近藤 それを分かってもらうには、実際に日本に来てもらって、日本の自然に触れ、日本人の生活を体験し、日本人と話をして感じてもらうことが一番です。いくら言葉を尽くして左脳に訴えても、右脳で感じなければ心から理解したとはいえませんからね。

かつて外務省がインドネシアの「プサントレン」というイスラム教の高校の先生10名を日本に招待し、2週間ほどかけて寺や高校の理科実験室などを見てもらったことがありました。そして帰途につくとき、団長の校長先生が「日本は色々面白かったが、中でも一番感動したのは比叡山だった。比叡山を歩いていると、ここには神々が宿っているようで、ここにこそ日本人の魂の原点があるような気がした」と話されました。私は、一神教であるイスラム教の国の人が「神々」と複数形でいわれたことに驚くとともに、比叡山という「場」が日本人の心を彼らに理解させたことが、強く印象に残っています。こうした経験から、私は、観光とは日本人の心を感じてもらう交流だと思っています。

日本人の強みを示す

堀井 日本人は伝統的に多神教の宗教観を持っていますが、明治維新の折、政府は廃仏毀釈*を行って国家神道に統一しようとした。西欧のような一神教こそ先進国の証だというコンプレックスがあったのかもしれませんが、今は逆に日本人の宗教観が注目されているのですね。

*明治初年、祭政一致をスローガンとする政府の神道国教化政策・神仏分離政策によってひきおこされた仏教排斥運動。

近藤 明治憲法を作るにあたって伊藤博文は、西欧がキリスト教でまとまっているように、日本も精神的な拠り所となる神様をひとつにして国民の心をまとめないと西欧に征服されてしまうと考えたようです。多神教は遅れていて、一神教が進んでいるというコンプレックスもあったかもしれませんが、それ以上に、短期間で富国強兵を果たし西欧列強に勝つには、一神教による「正か邪か」という二元論が便利だと考えられたのだと伺ったことがあります。

ブラウン 当時はそういう考えも必要だったでしょうが、もともと日本人には神仏習合という総括的な見方がありました。これからの時代は、他宗教の人や異なる文化を受け入れることができる日本人の力は大きな強みとなるでしょう。日本人自身がそれに気づき、そうした力を取り戻す必要があります。

堀井 そうした日本人の国民性は、海外の宗教者にも通じているのでしょうか。

松山 地理的、歴史的バックグラウンドがない国で言っても、なかなか通じませんね。最近では日本の仏教を実践している欧米人もたくさんおられますが、そうした外国人のお坊さんより、日本人のキリスト教の牧師さんやイスラム教のイمام(指

導者)の方が話が合うことが多い。例えばドイツに行って、日本の仏教をしているドイツ人のお坊さんに、「キリスト教やイスラム教の皆さんと一緒に会議をしよう」ともちかけると、「私たちはキリスト教もイスラム教も嫌だから日本の仏教をしているのに、そういう人たちと同席するのはご免だ」と断られたこともありました。日本人のお坊さんや牧師さん、イمامはほとんどそんなことをいけません。つまり、宗教以前に国民性の問題で、自分が生まれ育った国の文化や考え方は、宗教という器の話ではなく、刷り込まれてきたものなのです。

感性豊かな人を呼び込む

堀井 これまで日本が世界に貢献するためには外国に行って何かをすることばかり考えていましたが、皆さんのお話を伺って、外国の人に来ていただき日本を理解してもらうことも大きな貢献であるということに気づかされました。では、日本に来てもらった人たちに対して、具体的にどのようなアクションを起こせばいいのでしょうか。当協会は万博記念基金をそうした活動に活かしたいと思っています。

近藤 アーティスト・イン・レジデンス事業*への支援が考えられますね。歴史的建造物や文化財、自然の多い日本の環境は、感受性の強いアーティストにとってインスピレーションの宝庫だといえるでしょう。若いアーティストを招いて、そうした日本の良さを伸び伸びと感じてもらい、作品づくりに活かしてもらう。そして、そういう人たちが自分の国に帰って、日本で感じた日本人の精神性や自然観を広めてもらうのです。例えばポール・クローデル(1868~1955)というフランス人の作家は、1921年に駐日フランス大使として来日して日本が好きになり、その素晴らしさを世界に発信してくれました。

*アーティストを招聘するにあたって、一定期間滞在しながら作品を制作する事業。Artist-in-residence program。

ブラウン 1980年代にJETプログラム*が立ち上げられ、世界各国の若い人たちを日本に呼び、英語の指導や国際交流に従事してもらいました。これは日本ファンの外国人を育てるのに非常に効果的でした。近藤さんがおっしゃったように、発信力のある感性豊かな外国人を呼び寄せ、そういう人々を介して日本のことを世界に発信することはとても重要だと思います。

また、そういう外国人は、日本人にとっては自分を映す鏡にもなるでしょう。外国人の感性を通して、日本を見直す機会にもなります。日本が文化・芸術立国となるためにも、国際的な文化交流プログラムを意識的に増やしていくことが重要になるでしょう。

*地方公共団体が外務省や文部科学省などの協力のもとで推進する外国青年招致事業(The Japan Exchange and Teaching Programme)。外国語指導助手、国際交流員、スポーツ国際交流員の3職種に分けられ、小・中・高校や地方公共団体の国際交流担当部局などに配属された。

松山 ダボス会議に行って、いろんな方々とお会いしました。その中にはとてもお金持ちの方もたくさんおられました。そうし



た人の話を聞くと、世界各地のさまざまなNPOの活動を支援するために寄付をしても、なかには多額の寄付を受けたために利権や妬みが生じ、せっかくの活動がうまくいかなくなってしまうこともあるようです。必要なところに必要なお金を行き渡らせることは大事なのですが、それは非常に難しい。それよりも活動の広報を手伝うほうがよい場合もあります。

今やYouTubeなどで世界中に映像や音声を発信できますし、双方向ですから反響もすぐ分かる。だからクオリティーの高いコンテンツを作って反響を高めるために、感性に優れたアーティストを日本に呼び寄せるのもいいし、日本人のクリエイターが携わってもいいでしょう。そして「こんな素晴らしい活動をしている人たちがいる」「こんな素晴らしい場所がある」ということを広く知ってもらえば、本当の意味でその団体や個人を支援したいとか、行ってみたいと思う人も増えてくると思います。

近藤 万博記念基金事業として、世界で活躍しているNPO団体や、日本の文化の良さを発信している人を褒賞してはどうでしょうか。お金ではなく、名誉を与えるのです。あるいはそういう活動をしている人を集めてシンポジウムなどを開き、活動をしている人たちの声を伝える媒体になってあげるのもいいでしょう。

堀井 ある大学の教授と話したのですが、アメリカでもヨーロッパでも、大学で日本文化を研究している若い研究者がたくさんいるそうです。そうした若い指導者や准教授、講師クラスの人を日本に招いて日本の文化や精神性に触れてもらい、それを自分の大学に戻って学生たちに伝えてもらう。そういうプログラムも有効ではないかとのことでした。

ブラウン 私の視点は少し違います。そうした先生たちは日本に対する知識や自分の世界観をお持ちでしょうから、むしろ日本に対するイメージや先入観のない若い芸術家やクリエイターのほうが、日本で受ける衝撃は新鮮で強いと思います。また、今や発信力がとても重要です。日本で感じたことをしっかり発信できる人がいいですね。

松山 私は、日本には世界の潮流とは全く違う価値観があることを知ってもらいたいと思っています。例えば、現在のビジネス界は短期間に高成長とグローバル化を遂げることに最高の価値を見出しますが、京都ではそうしたことはあまり評価されません。どれだけ長く事業を続けているか、京都の町や文化にどれだけ貢献しているかで企業のステイタスが決まるのです。西利という京漬物の老舗企業の社長さんがおっしゃっていましたが、東京で会議の後に懇親会があると、規模の大きな会社ほど上座に案内されるそうです。しかし京都では、京都の町に対する貢献度を基準にして席順が決まります。小さな会社でも、祇園祭で役員をしていたり、町の振興に貢献していればステイタスは高いのです。また、京都にある企業の4～5%が100年以上続いています。

こうした話をアメリカのビジネススクールの学生さんたちに

すると、京都には高成長やグローバル化とは別次元の価値観があることを知って、皆さんとても驚き、感心されます。これも心のお土産ですね。このように日本に来て初めて分かる違いをしっかりと形で伝える努力が、将来の日本のプレゼンス(存在感)を高めるのだと思います。

匠の心と技を世界へ

近藤 成果至上主義はビジネスの基本ですが、私は自己の目標に向かって努力する過程も重視すべきだと思います。

剣道や柔道が、礼に始まり礼に終わるのは、お互いにここまでしてきた努力に対して敬意を払っているからです。努力のプロセスを讃えず結果しか見ないのでは、人間の心を軽視していると思います。剣道界がオリンピック種目に名乗りを上げないのは、メダル争いの競技にしたくないからだと聞きました。

また、源氏物語のような古典文学を原文で読もうとすると、とても骨が折れます。しかし、辞書を引いたり、言外の意味を考えたりして、昔の人の気持ちを理解しようとする努力にこそ大きな意味があります。ストーリーを知りたいのであれば、ネットで検索すれば簡単に知ることができますが、それにどんな意味があるのかということです。

こうしたことは日本の匠の精神にも通底しています。作品を高値で売ることが目的ではなく、見えないところの細工にこだわったり、自分が納得いくまで作品に心と技を注ぎ込むことを最重視しているのです。こうした匠の精神こそが、日本の文化を支えてきたのです。

私は、グローバリゼーションや成果主義に偏重するあまり、そうした匠の精神が失われることがとても怖いと思っています。結果ではなく、ベストを尽くすことが心の安らぎに通じるといふ日本人の心の豊かさを、もっと世界の人に知らせるべきだと思います。

ブラウン 外国の人は、日本の匠の文化にとっても感銘を受けます。自分を極めることに価値を見出す精神は、長い歴史の中で培われてきたものです。江戸時代の人々は生活の中に美や文化を取り入れ、生きること自体が美しいという美意識を持っていました。現代人はそうした感覚が貧弱になっているのは悲しいことです。

松山 お金を儲けるにはアイデアとやる気が必要ですが、お金を使うとなると文化に対する関心や素養が必要です。

とりわけ若くしてビジネスで成功を収めた方の中には、羽振りのいい暮らしをしていますが、文化に対して関心が薄かったり、刹那的で品や徳に欠ける人がいて残念に思います。ビジネスリーダーたる人は、そういう面にも手間と時間をかけて磨いてもらいたいですね。

ブラウン どうすれば徳を磨くことができるでしょうか。

松山 例えば、老舗企業に学ぶことが大事だと思います。350年にわたって事業を続けておられる月桂冠の大倉治彦社長は、銀行勤めを経て家業の酒造りを継ぐまで、父親から



酒造りについて教わったことは一度もなかったそうです。その代わり、「嘘をつくな、贅沢をするな」といった生き方については、耳にタコができるくらい聞かされてきたそうです。そういう価値観や人間の徳といったものを、若い経営者の方に学んでほしいですね。

日本人が海外でできること

堀井 日本人が海外に出て文化的に貢献できることはありますか。

近藤 あります。例えば私は今、かつてフランスにあったアルザス成城学園という私立大学の寄宿舎の建物と庭を買って改修して、欧州にある日本の伝統工芸品を鑑定・修復する工房をつくり、また日本庭園や能舞台、茶室などを建てるプロジェクトを立ち上げつつあります。ヨーロッパには日本刀や甲冑、茶碗、漆器など、ものすごい数の日本の伝統工芸品があるのですが、現地の人はそれをどう扱っていいかわからず、修復もせずどんどん価値が下がっています。そこで日本の伝統工芸の職人さんがアルザス成城学園の跡地に工房を持ち、そうした美術工芸品の鑑定や修理を行うとともに、修復する職人の育成にも携わっています。

ここで大事なのは、日本の匠職人がヨーロッパに行って現地の職人や学芸員と触れ合うことで、ヨーロッパ人が日本人の匠の技と心を直に見て感じ、学ぶことです。あるいは能を観たり、お茶を楽しむ。本来なら日本に来てもらうのが一番いいのですが、同じようなものをヨーロッパに作り、そこを拠点として、現地の人に日本の伝統文化の粋に触れてもらいたいと思っています。そこで日本人と交流することで、気に入ったら日本に来てもらってもいいし、日本に来なくてもヨーロッパで手軽に日本人の感性に触れることができます。私はそういう場所を作りたいと思って活動しています。ジャパンハウスを作ってアニメを宣伝するのもいいですが、松山さんがおっしゃった日本文化を「doing」、「being」できる場をヨーロッパに作れば、かなりの成果があがると思っています。

松山 海外在住の日本人は、日本文化のアンバサダー（大使）だと思います。そういう方々のネットワークを広げていけば、日本文化の良さをより多くの外国人に知ってもらえるでしょうし、日本観光を促進する一つの道筋にもなるでしょう。

ブラウン 私は今、「会所プロジェクト」というのを進めています。「会所」とは、平安時代の終わり頃に存在した文化サロンです。貴族や武家、町人らが身分を明かさず

に集う連歌会が原型といわれ、室町時代には茶道や香道など芸道の発祥を支えました。こうした会所文化を現代に合わせた形で作ってはどうかと考え、近衛忠大さん（クリエイティブ・ディレクター）を理事長として平成の会所を作ろうとしています。そして今、ニューヨークやドバイ、台北など、世界的なネットワークもできつつあります。

松山 外国での日本食や禅などは、その本質が間違っただけで伝わっている場合が多々見受けられます。例えば、禅の目的は自分自身を見つめ明らかにすることですが、欧米における「ZEN」は、会社の業績を上げるとか、人間関係を良くするといった非常に功利的な手段にされています。海外に出ていかざりば、そうした本来の意味を知らしめることも私たちの役目の一つだと思います。

近藤 ブラウンさんがおっしゃった「会所」のように、短期的に何かを成し遂げるためではなく、何となく問題意識のある人が集まっているような意見交換をする場は必要ですね。そこに日本文化を知っている人がいて、その人を中心にしてネットワークの輪が広がっていくやり方を奨励すればいいでしょう。そしてうまくいったオーガナイザーを表彰してもいいですね。

堀井 とても有意義なお話を伺い、目が開けるような思いです。皆様のご意見を参考に、当協会も万博記念基金事業を通じて、日本の良さを発信するプロジェクトをどんどん支援していきたいと思っています。ありがとうございました。

（2017年2月10日／大阪天満宮にて）



エバレット・ブラウン氏

1959年、ワシントン生まれ。1988年から日本定住。epa 通信社日本支局長を経て、ブラウンスフィールド代表、「Kyoto Journal」寄稿編集者。

近藤誠一氏

1972年外務省入省。ユネスコ日本政府代表部特命全権大使（06年）等を経て、2010年に文化庁長官に就任。13年同長官を退任後、現職。

松山大耕氏

1978年京都市生まれ。東京大学大学院農学生命科学研究科修了後、平林寺（埼玉県）で修行。06年より現職。観光庁ビジットジャパン大使。

（50音順）